

寺婦のひろば



40周年記念研修会での一コマ 講師：清胤祐子先生

求められる感性(悲)

因幡組浄徳寺 今西 収

「お母さん 朗読の宿題があるんだけど聞いててね。」見えねどもそのみすがた／きこえねどそのみこえ／さわれ／われのみぞ知る／不断のちかい／不滅のひかり／ひざまづきてもろ手あわせ／うたがわじこのよろこびに／うけますや／我が心の合掌。」「あつ、九条武子さんの詩ね、ところでそのみすがたとどなたと思う?」「うん、よくわからないけれど、たぶん仏さま(アマダさま)と思うよ。」「そうね、私もそう思う。でもどうしてその仏さまを見ることのできないのだろう。そのみ声を聞くことができないのだろう。」「?」「それはね、仏さまの世界はかぎりがなく、私たちの世界にはかぎりがあるからなんだよ。かぎりがあるということとは、苦しみが絶えないということでもあるんだよ。かぎりの

ある世界では、すべて物事は比較することによって判断されるの。そして自分の思いどおりにならないことに苦しんでいるの。仏さまはそういう私をどうにかして、苦しみの原因であるかぎりをとばらしてくださいのよ。かぎりなきいのち(無量寿・大悲)、かぎりなき智慧(無量光・大慈)でもってね。だから仏さまは見えないけれど、私がかぎりに気付くとき仏さまは見えるのでしょね。わかった?」「?」。

(ある日の母子の会話)

ぼんやりと生きてきたから気づかない「風がきれい」と盲目の子言ふ。(橘かほる「朝日歌壇」)知性(慈)はもちろん大切ですが、より感性(悲)の豊かな坊守さまが望まれる所以です。

第一回目の坊守式

飯石南組西蔵寺 源 光子

ここに一枚の黒白の写真が残っています。裏に昭和四十三年九月二十八日～二十九日於平田妙壽寺、お裏様お迎えして最初の坊守式とあり、総勢九十名位でしょうか。出雲と石見二会場に別れふり返って見れば戦後戦後と云はれた後半、東京オリンピックでは、東洋の魔女と云はれたバレーの金賞等々、世をあげて、上り坂をまっしぐらと云ふ時代の背景もありました。お裏様をお迎えする服装のことも前もって論議あり、お裏様に失礼のない様にいろいろありました。参加者は無地の着物を揃へよう、いやいやその上に黒の夏羽織を等々、とても暑かった思い出がありました。見覚へのあたる樟原宏朗所長のお顔が判りました。戦後生まれの子供達が、ダーツと育っている時代背景もありました。前裏方の「お言葉」「坊守の心」の一語一語に、坊守の基本姿勢をお示し頂き、まづ自分自身がおみのりを聞くこ

と、「佛の子」を育てるのは、おみのりを如何に次代の子供に引きつぐかが、皆さん坊守の両肩にかかっています」とお言葉があり、現代世相の中で、重大な坊守と云ふ立場を、見失ひがちな私に、お裏様の一語一語は、私共の心に切々と沁みとおるものがありました。「私一人ではない」団結して事に當れば、と云ふ責任の重大さを、お諭し下された、充実した坊守式でした。戦後赤石の町内三ヶ寺の佛婦が出来、三四年後町内五ヶ寺の連合佛婦が結成発足。花祭も町内の寺院を輪番に、佛婦には意欲的な方々も居られ、機も熟し、夏休みの行事として、指導の講師を迎へ、六年生の一泊研修をすることに一決、小学校の先生方、町当局にも働きかけ、「参加の子供達」へと云ふことで、助成もして頂きました。熱心な佛婦役員さんの支へがあつて、第一回は三次市照善坊住職福岡欣嗣先生とサポートの助手の先生、波北先生へと講師先生も次々とバトンタッチ、少年少女一泊研修会は三十九回をかぞへ、最初頃は、子供数も多く、男女四十六名

の参加あり、晨朝にはじまり朝のお話、自習お掃除と夜はキャンプファイア、星月夜の下で天体のお話、ゲーム、寸劇等々、婦人会の母さんチームも参加、佛教讃歌ダンスまで、二日間は追跡ゲームありで「いのち」の大切さを中心に、作文もありで、年々講師もバトンタッチがありました。寺族佛婦の方々の献身的なお手伝い等々、平成十五年連合佛婦開散まで続きました。一つの大事業起すことの重大さ、団結する事が如何に大切なことかと思ふ昨今です。第一回に参加した子供さん達皆孫が居られる年代になりました。故郷を離れて遠く住む方達も、あの夏の寺院での一泊研修は、強烈な思い出として伝わったと確信しています。

* * * * *

私事ですが昭和十八年九月二十六日くしくも同じ日に、結婚



昭和43年9月28日～29日 於平田妙壽寺、お裏様お迎えして最初の坊守式

しました。第二次大戦の最中でした。毛利の城下町に育った私達が、尼子の砦の跡へ素手で乗り込んで来た記念すべき日でした。戦争も末期、沖繩戦に備へて



昭和59年度 山陰教区寺族婦人研修会 10月16日(火) 於本願寺山陰会館

私の父も僧侶でありながら「軍服」でした。はじめて見る赤名峠で車を留め、指さしながら、遠く霞んで見えるのが、広島五師団の演習地だ、してこの赤名峠より見下したこの地が「あんたの骨を埋める地だ」と頂上の松の木を抜いて、西蔵寺の境内へ、植えてくれました。記念の松の木はすぐ枯れましたが、娘は根つき、激動の昭和生き、あの時四十八才の父も沖繩戦に備へて、「さわわ」の島「徳ノ島」へ中隊長として宇品から、輸送



平成21年9月14日 於平田妙壽寺 40周年を迎えて

存じます。尊い仏縁をいただき、ありがとうございました。こと、厚くお礼申し上げます。現代の社会情勢は過疎、高齢

南无阿弥陀佛 寺族婦人連盟が結成され、この度その四十年を迎えることができました。とは、ひとえに先人の方々のお導きと、今日に至るまでの関係の方々のご尽力の賜でございませう。心より慶ばしく有難く

西方寺 河野宜子

山陰教区寺族婦人四十周年 記念のご縁に遇つて

指揮官として渡り、第一船上陸、整列(百七十名)の点呼をして、いた時、沖にいた第二船は、「暗号傍受」米の標的となり「爆沈」流出した重油により暗い海面は火の海となり目の前の「徳ノ島」

めがけて飛び込む者あれど火の海で、ほとんどが戦死、そのむごさ、どうしようもない地獄を見た。九十四才を死ぬまで戦争の愚かさ無惨を語っていました。私も再び戦争のない平和を

化、少子化とどれをとりましても私たちが今直面している事柄です。そのような中にありまして坊守という役割の重要性を感じます。この度の研修会は清胤祐子先生のご縁をいただきまして、寺院活動の具体的な示唆をいただけたように思います。中でも「お寺で生活をしたことがない方にとつては、仏教用語の難しさにいやけがしてしまいお寺から逃げてしまう」と仰しやられたことはとても印象深く、私の新たな気付きとなりました。そして先生は仏典童話を手作りの紙芝居になさって私たちに上演して下さいました。大人になっても紙芝居はワクワクしましたね。ご講話を通して、お寺へ足を運んでいただけていることに様々な工夫をなされていることを知り、形式通りで安心して

願つて居ります。語り継ぐ戦争と読んで頂ければ幸でございます。私ごとを書きました。兵戈無用の世の中に。 いてはいけないことを感じました。早速、小学校の冬休みが始まったから「こども報思講」を計画して、紙芝居をやってみようと思つています。新しい試みは結果が出るまで非常に長い時間を要し、継続することの難しさも伴います。しかしこの私のご信心めぐまれたご報謝の日々があれば、困難を越える力も継続の力もいただけるのではないのでしょうか。数多い教えの中で浄土真宗というみ教えに会い、坊守とし阿弥陀さまの家に住まいさせていただいております。私の努力や計らいではないことを思いますれば、ただ勿体ないばかりでございます。親鸞聖人の教えを仰ぐ百三十名が一堂に会しお念仏のとどろきにつつまれて、仏法にあえた喜びを共にしたひと日でございます。合掌

御影堂修復完成 慶讃法要に参拝して

川本組信楽寺 非々 玲子



ライトアップされた御影堂

平成二十一年五月二十二日から二十六日、本願寺御影堂大修復完成慶讃法要が営まれました。私は法要初日の縁儀の列に加わり献華するとうご縁に恵まれ、ありがたく嬉しい思い出となりました。北海道のスズラン、沖繩のデンファレ、島根県産のユリというように、各地の色とりどりの花が教区の代表によって尊前に供えられ、法要期間中、余間壇にお供えされていました。御導師のご門主の「表白」に続いて全員でお正信偈をおつとめたのですが、満堂の参拝者の正信偈を唱和する声とお念仏の声は、修復なった御影堂を揺るがすば

かりに響き渡り、厳そかで感銘深いものでした。ご門主のご親教では、次のように述べられています。「御影堂は、宗祖聖人の御眞影さまを安置している御堂ですから、聖人にお目にかかるという味わいがあります。お正信偈やご和讃を拝読することは、宗祖からお言葉を聞かせていただくことです。さらには、私の思いを宗祖に聞いていただくとも味わえることでしょう。私の願いをかなえていただきたいということではなくて、今日まで生きてきたわがいのちを、隠すことなく受け止めていただくことです。御影堂は私たちの「心のふるさと」なのです。「心のふるさと」である御影堂、三百年前前に建てられて、二百年前に大修復がなされ、この平成の大修復は十年がかりの大工事だったわけです。創建時の建築技術がいかに優れたものであったか、そしてお念仏を喜ぶ人々の心がどれだけ熱いものであったか、さらに、御影堂を「心のふるさと」としてこられた先人の方々に思いを巡らすとき、この平成大修復完成慶讃法要に参拝できたことを、改めて喜ばせていただくほかありません。このご縁に遇い得た私は、思いを新たにお念仏の日々を過ごさせていたたくとも、聖人のみ教えが末永く受け継がれるように、坊守として日々精進すべく努めていきたいと思えます。

合掌

二〇〇八(平成二十)年度 「寺族女性教区代表者 研修会」に参加して

飯石北組常信寺 桔梗 和枝

去年の三月本願寺の開法会館での研修会に、教区代表として飯石北組より二人参加させて頂きました。北海道から沖繩まで各教区から坊守たち五十名の参加でした。研修は講師先生方の多彩さと充実振りに、終始聴き入り参加させて頂いたことに感謝でした。内容は基幹運動、仏教讃歌、仏事作法等についての講義と実習。班別研修は「一人ひとりの苦悩に共感できる開かれたお寺にするには」についての法座活動。この班活動では、生きいきとした坊守さま方の集まりで、旧知の友のように話し、初参加の私も親しく交わることができました。鹿児島では報恩講が一週間も行なわれる所もあるとのこと、またある地では日曜学校の卒業生(高校生)の会を開いているなど、各地方、各寺での特色ある布教活動にもふれることができました。中心講義の「基幹運動とは」は季平先生のお話。一昨年出雲市でも先生の講演をお聴きしていましたが、今回更に理解を深めさせて頂く機会を得て、懸命にメモを取りながら聴きました。お中心課題の『悲しみや喜びの中で「お

寺に行ってみよう」と思ってもらえるようなお寺へとつくりかえていきましょう』については、寺の日常を思い浮かべながら聴き入りました。今、私の寺の、私自身の大きな課題となつていきます。そして、あるとき先生の「人間は弱いままでいいんですよ。自分の弱さと向き合いそれを大事になさい。」「つらかったことを分かたて下さる仏さまがいらつしやるんですよ。阿弥陀さまという仏さまの働きですよ。」に、背中を押してもらったように感じました。先日近所の親しい方が突然亡くなられ、彼女の自死の前に私は全く無力でした。めざしていた課題はお題目でしかなかったことを知らされました。今回この報告文を書かせて頂いたことに感謝しています。改めて課題について再考し、活動していこうと思つていきます。

編集後記

▽平成二十一年五月七日、初回の寺族婦人会連盟各組代表者会が開催され、九月十四日の四十周年記念研修会の準備が、スタートしました。

▽前年度の常任委員さん達より引き継ぎ、何もわからないままの出発でした。四十年という長いあいだ先輩達が育んでこられた伝統のある連盟の節目の年でもあり、今までの育てを力強く感じました。

▽今年度最後の会では、多くの意見交換が活発になされ、総会の開催を望む声もあり、次年度は寺族婦人会連盟の大きな飛躍の年になることを期待しています。